



〈資料〉統計學の基礎についてのマルクスの貢献

安達, 和久

(Citation)

国民経済雑誌, 94(1):70-73

(Issue Date)

1956-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80040436>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80040436>



- 1 分業の法則 (Gesetz der Arbeitsteilung)
- 2 生産永続の法則 (Gesetz der Kontinuität der Produktion)
- 3 生産要素の均衡的結合の諸法則 (Gesetzen der Proportionalität)

このうち第二の法則が、維持の法則として彼等の経営学全体を貫いている。第三の法則の究明は、組織論の内容となつてゐる。ここでは近代国民経済学の生産論の成果を吸収せんとするこゝろみが行われている。

III

我々は以上において、アムステルダム学派の経営学なるものの輪廓を、ヘリドンの論文を中心としてながめたのである。その結果我々が感ずることは、この国の経営学の型がドイツにおいて出来上つた経営学の型に極めて近いものであるということである。特にシュミット学派の経営学とそれは多くの類似点を有している。我々はシュミット経営学の発展の跡を拙著「ドイツ経営学」(森山書店・昭和二十九年)において三段階に区分してえがいたのであるが、その発展の第二段階の見解がリムベルクのそれに最も近い様である。

シュミットの経営学はその後ニックリッシュ経営学へ次第に接近し、その第三段階「人経済論」の時代へと進むのであるが、リムベルクの経営学はこの道をとつていない。ドイツにおけるシュ

ミットの後継者達、中でもグーテンベルクは、国民経済学の近代理論を経営学へ導入することに努め、師シュミットの一つの面を確かにのばしてはいるが、師の晩年の傾向とは違つた方向へ進んで行つた。我々は、一面においてアムステルダム学派の経営学がシュミットの経営学に近いことを指摘するとともに他面においてこの学派がシュミットの後継者達が歩んでいるのと同じ方向に向つてゐることを感じとることができる。この意味においてアムステルダム学派の経営学は近代性をにおわせてゐる。(市原季一)

統計学の基礎についてのマルクスの貢献

Robert Horváth, Die Beiträge von Marx zur Grundlegung der statistischen Wissenschaft (Wirtschaftswissenschaft 1955 Jan.)

この論文はマルクスの諸労作を検討して、マルクスがいかに、統計学の基礎がためをし、また実際彼がどの様に統計学の発達に寄与したかを、明らかにしようとしている。その際、殆んど分ち難く、マルクスと共同して研究を進めたエンゲルスの諸労作も考慮されている。この論文の概略は以下に述べる通りであるが、統計学を「数理統計学」としてだけ理解する人々にとつては、そこで述べられるマルクスの「貢献」が、統計学への貢献であると認

められないであろう。紹介者は、この論文から逆に、マルクスが貢献したといわれる統計学とは、どの様なものであるかを読みとることに最大の興味をもつた。マルクス主義統計学とはなにかという問題にこの論文は正面から答えていない。その点で残念であるが、この問題への解決のいとぐちを与えるものとして、紹介の価値があると思う。

一、マルクスの統計学への貢献をみるには、当時のブルジョワ統計学と比較する必要がある。マルクス出現以前の最大の代表者としてケトラー (Quetelet, 1796-1874) が挙げられる。ケトラーは統計学を専ら、数理統計学と官庁統計の経験から生い立つてきたものとみた。その結果、十八世紀後半から十九世紀前半までドイツ大学統計学派 (Universitätsstatistiken) によつて代表されてきた歴史的な性格が失われた。ケトラーは統計学が抽象的科学的として、数学的性格をもつものと考え、統計学の課題は、一見、偶然的な社会現象のなから法則性 (Gesetzmässigkeit) を発見し、狭い限界内で生じるその法則の修正 (Modifizierung) を研究することにあるとした。しかもその法則性は、「宇宙の偉大なる建築家」(Le Grand architecte de l'univers) が全宇宙を秩序づける法則性と同一であると考えた。この様な考え方は、ドイツ大学統計学派より或意味では退歩である。大学統計派は、各国の個々の出来事の記述にとまづいてきたが、シュレーツァー (Ludwig von Schlotzer, 1735-1809) の標語「統計は静止せる歴史にして、歴史は進行せる統計なり」

に忠実であつた。またケトラーの思想は彼の同時代の水準からみても劣つてゐる。ライプニッツは既に十八世紀の初めに「発展」についてかなり明白な観念をもち、ヘルダー (Herder) は有機的発展論として更にこれを発展させていた。これらは、機械的再起の原理 (Das Princip des Mechanischen Wiedergeschehens) を克服しヘーゲルへの途を開いた。ヘーゲルは十九世紀のはじめに、観念論に深くまとわれていたとはいえ、弁証法的歴史観をブルジョワ哲学の枠内では最高の高さにもたらしつてゐる。

ケトラー統計学の基礎をなす、機械論的、神秘的歴史観を批判し、積極的に科学的な基礎のうえに統計学をおく仕事はマルクスによつて果された。

二、マルクスは弁証法的唯物論を確立することによつて、事實上、ケトラーの統計学の基礎を批判した。即ち、自然についてと同じく社会についても唯物論的見地を貫かなくてはならないことを明らかにすると同時に、社会には自然法則 (均衡や保存 (Kon-servation) 等の) とは異なるより高次の特殊な客観的法則が存在することを証明した。これによつてマルクスは社会科学を見せかけの自然科学 (Schein-Naturwissenschaft) という汚名や「偶然」への依存から解放した。これによつて、社会にも自然にも同等の妥当性を要求する抽象的・数学的把握を打破し、形而上学的、観念論的な世界観を打破した。これは統計学に弁証法的唯物論からの基礎づけを与えたことを意味する。

マルクスは弁証法的唯物論を人間社会に適用して、史的唯物論を打立てることによつて、これを導きの糸として政治経済学をつくり上げた。マルクスの政治経済学は統計学が具体的に仕事を進めてゆくうえでの基礎を与えた。即ち、統計学はそれ自身一個の科学、一種の「社会的物理学」(Physique Sociale)を形成するのではなく、政治経済学と密接な関連にある。統計学の対象が人間の経済であれ、人口それ自身又はその文化関係であれ、方法的統計作業 (die methodischen statistischen Aufzählung) に於ては、政治経済学によつて研究された経済法則との関連で行われなくてはならない。また史的唯物論及び政治経済学は統計学の体系化を可能にした。政治経済学の基礎概念が科学的に規定されていなかったとしたら、新しい人口統計、経済統計は存在しなかつたであらう。例えば人口については、マルクスが「経済学批判序説」で述べている様に「人口がそれからなつてゐる階級を省けば、一個の抽象である。階級は再び、それがなり立つ要素、例えば賃労働資本等を知らなければ空語である。」

三、マルクスは政治経済学に於ける基礎的な範疇を検出する際に科学的な抽象の仕方を作り上げることによつて、高度の統計的概念構成の方法を明らかにした。例えば、彼は労働の近代的概念を資本主義社会に存在する多様な具体性のなかから抽象した。この抽象は理想型を作るための主観的なものではなく、「経済学批判序説」で彼自身が述べている様に、高度に発達した資本主義社会

の労働過程の総体の中では、各人の労働は互に代置されることができ、個々人の偏差は消滅してゆくという、現実が行う抽象である。従つて労働一般という抽象はすぐれて歴史的なものである。

またマルクスは、法則の貫徹と偏倚との関係を弁証法的に解明することによつて、例えばケントレーが考えていた様な、法則と偏倚の機械的な理解を批判するよりどころを与えた。

例えば、マルクスは「資本論」第三巻に於て市場価格が価値のより発展した現象形態である生産価格によつて規制される事情を分析している。そこで市場価格が生産価格に引きつけられてゆく社会的条件を明らかにし、また資本主義において法則が貫徹するのは、たゞ極めて錯雑した近似的方法であつて、永遠の変動の固定することのない平均としてあることを示した。

マルクスは総体経済についての範疇 (Gesamtwirtschaftlichen Kategorien) を確立することによつて、統計学がこれらの範疇の具体的表示をなし、現実の正確な像を与え、新しい関連や法則性を追及することを可能にした。即ち、マルクスは彼が完成した価値論の上に立つて、(二十三日) ドグマの批判、二部門分割の確立を行い、再生産表式をしあげた。これによつて、統計学に於ては、国民所得統計の枠が与えられ、国民所得を階級的視点から、再生産の問題と結びつけて研究できるようになつた。

マルクスは殆んど専ら演繹的理論にひたつていたイギリスのブルジョワ経済学の代表者と対照的に、ブルジョワ統計学を使用し、

革命的労働者階級のためのブルジョワ統計の批判的利用の方法を示した。マルクスの統計への興味は彼の戦友エンゲルスの「英國に於ける労働者階級の状態」によつて呼び起された。この書は新しい統計的概念によつて研究されている。「資本論」第一巻はマルクスの見事なブルジョワ統計の利用の見本を示している。マルクスがロシアの農業について統計的研究を行つていたことは、エンゲルスが「資本論」第三巻で明かにしている。マルクスの統計的研究の範囲の広さは、例えば、一八五九年の論文「人口、犯罪、貧困」でも分る。

マルクスは単にブルジョワ統計の批判的利用を行つただけでなく、諸国のプロレタリアートの一般的、総括的統計を作成しようとした。これは後年のプロレタリア統計、更には社会主義統計の基礎を与えた。エンゲルスは一八四五年、ドイツの労働者階級についての統計資料を集めようとした。これは、恐らく当時の統計的調査技術を過大評価したために失敗した。マルクスは彼の生涯の最後の時期に、家計調査技術の発達、第一インターナショナル時代の労働者階級の自覚増大をみて、新しい、詳しい調査を行おうとした。百問からなる質問表は一八八〇年、フランスの「社会主義者評論」(Revue Socialiste) に発表された。マルクス及びエンゲルスの思想に基礎をおいた統計理論及び統計作成が強力に発展したのは、レーニン、スターリンに指導されたソ同盟に於てである。

(安 達 和 久)

資 料

ステファン・ヴァラヴァニス

「古典派理論の矛盾についての

パテインキンの見解の否定」

Stefan Valavanis: A Denial of Pateinkin's Contradiction

(KYKLIOS, vol. VIII 1955-Fasc. 4)

一、「古典派」理論。パテインキン等がその中に矛盾をみつけ、ヴァラヴァニスがそれを否定しようとする彼等のいう「古典派」理論の骨子は次のようなものである。

財の種類は n 個あり、第 i 財の価格を P_i 、超過需要を X_i とすれば、超過需要関数は次の性質をもつ。

$$X_i(P_1, \dots, P_n) \equiv X_i\left(\frac{P_1}{P_n}, \dots, \frac{P_{n-1}}{P_n}\right) \quad (i=1, 2, \dots, n) \quad (1)$$

$$\sum_{i=1}^n P_i X_i \equiv 0 \quad (2)$$

第一の性質は財の需給関数が全ての価格の 0 次の同次関数であることを意味し、これは経済主体の選択理論から導き出される。第二の性質は、価格状態のいかんを問わず財(紙幣を含まない)の超過需要は常に相殺していることを意味し、これは各経済主体が今期の収入を悉く、今期に支出するという前提から導かれ、「セイの法則」と呼ばれる。(註一)